

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

標準 實川風は2015年度、パリのロン・ティボー・コンクール

スペイン国際コンクール(＝従来のロン・ティボー・コンクール)に3位入賞(1位なし)して注目されるピアニスト。現在まだ27歳、これがデビュー・アルバムである。いっぷう変わった趣向のアルバムで、前半をスタインウェイD1275、後半をベーゼンドルファー250(1909年製)と、ピアノを変えて弾き分けている。プログラムの最初の曲がシューマンの《アラベスク》、そして最後の曲も同じ《アラベスク》というのは、この曲に対する思い入れと同時に、使用した両ピアノの違いを同一曲で確かめて欲しいという意図もあるようだ。他の曲目は、前半にチャイコフスキー《ドゥムカ》、シヨパン《スケルツォ》第3番、そして、ピアニストとしても知られる若手作曲家J・F・ヌーブルジェの《メリーゴーランドの光》ピアノのための《タンゴ》という作品。後半にはベートーヴェンの《ワルトシュタイン》ソナタと、前記のとおりシューマン。チャイコフスキーでは土着の哀歌の切々と訴える趣を、シヨパンでは予感と焦燥、千々に乱れる感情といったものを、若者はタッチ(音色)の変化を生かしながら鮮やかに表現する。ヌーブルジェの新曲からも、またべつなセンスの良さが伝わる。ベートーヴェンも水準を抜く新鮮な佳演ながら、今月並んで出た清水和音のそれと比べると、深みは未だしの感。が、これは当然のことで、このピアニストは期待感をそそる。

歌崎和彦 ● Takahiko Utsaki

【録音評】 實川風のデビュー盤で、冒頭と最後にシューマンの《アラベスク》を演奏している。CD層でも繊細な音色の持ち主であることがわかるし、音の精度もなかなか高い。楽器はスタインウェイとベーゼンドルファーを使い分けているが、SACD2chでは響きがよりこまやかにほぐれて、繊細な感覚がバランスよく聴き取れるし、硬軟の変化が生きるなど、より魅力的に感じられた。自身もピアニストであるヌーブルジェの《メリーゴーランドの光》の音色感なども美しいが、とりわけ最後に再演される《アラベスク》が美しかった。(91/92)



THE RECORD GEIJUTSU 標準 特選盤

■ 實川風 / ザ・デビュー

【①】シューマン：アラベスク ②チャイコフスキー：ドゥムカ(ロシアの農村風景から) ③シヨパン：スケルツォ第3番 ④ヌーブルジェ：メリーゴーランドの光-ピアノのためのタンゴ ⑤ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番(ワルトシュタイン) ⑥シューマン：アラベスク

實川風(p)
[ART INFINI] © MECO1033
CD&SACD ¥3000

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 實川風は1989年生まれ。東京藝術大学及び同大学院に学び、昨年のロン・ティボー・コンクールで第3位(1位なし)を得た俊英。これはその記念すべきデビュー盤。最初の4曲はスタインウェイ、後の2曲を1909年製ベーゼンドルファーで弾き、シューマンの《アラベスク》は両者で聴き比べるという趣向。最初の《アラベスク》は静かで詩的な余韻に満ち、《ドゥムカ》は民謡風の旋律がしみじみとした感慨を込めて奏でられる。しつとりとしたほの暗いタッチだが、後半の舞曲で情熱の焔が燃え上がる。確かな技術と安定した構成感。その上、すでにして自分の「歌」を持っている。《スケルツォ》

第3番は切れの良い俊敏な指の動きに力強い和音。もともと悲劇的な趣の強い曲だが、實川の演奏には表面的な甘さがなく、全体にきりりと引き締まり、力と高揚に満ちたフィナーレが痛快だ。ヌーブルジェの《メリーゴーランドの光》はタンゴ風の現代曲でリズムのノリがよく、切れのよいタッチに弾き手の響きに対する鋭敏な感性が認められる。ベーゼンドルファーによる2曲はやはり音色と響きがまるで違う。《ワルトシュタイン》第1楽章の和音の連打は軽やかに風を切つて疾走。イントロドゥウツィオーネもモダンのピアノに比べて必要以上に音色が重く暗くならない。ロンドも落ち着いた演奏で、木製の楽器のイメージが美しい。知性と感情の均衡が取れ、表現も洗練されている。